



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高校中退後の若者たちの生活・労働・学びと成長 : 内閣府高校中退者調査から
Author(s)	乾, 彰夫
Description	C: シンポジウムⅡ テーマ: 学校の限界線上における学び 「遊ぶ・学ぶ・働く : 持続可能な発達の支援のために」シンポジウム報告書: 子ども発達臨床研究センター総合研究企画(2011サステナ企画). 平成23年11月2日(水)~4日(金). 北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟 教育学研究院会議室. 札幌市
Citation	「遊ぶ・学ぶ・働く : 持続可能な発達の支援のために」 シンポジウム報告書, 44-53
Issue Date	2012-05-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49386
Type	conference paper
File Information	Inui.pdf



「高校中退後の若者たちの生活・労働・学びと成長

——内閣府高校中退者調査から」

発表者：乾 彰夫

(首都大学東京)

さて、私の方からは、高校中退者が中退後どんなふうになっているのかを中心にお話をしながら、中退者に対する支援の在り方についていくつか提起したいと思います。

主に使いますのは、内閣府が昨年からすすめている高校中退者についての調査——宮本みち子さんが座長で宮崎さんもメンバーの一人ですが——のなかの、昨年実施したアンケート調査結果です。なおその後、インタビュー調査もじっしてありますが、これはまだ分析中です。

1. 高校中退をめぐる状況

最初に、高校中退をめぐる全体の状況です。これは少し頭に入れておいてもいいのかなということで、そのことを最初にお話しします。今、中退者っていったい増えているのか、減っているのかということですが、実はよく分からない。例えば、文科省が毎年高校中退者についての数を出しています。「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」です。図1がそれです。これで見ると減少しているんですね。このグラフはちょっと見づらいんですけど、次のグラフ(図2)と比較しやすくするために、上が0になっていて、中退率をマイナスで描いています。

これで見ると2000年ぐらいから中退率が一貫して減っていています。ところが、もう1つ、じゃあ、高校に入学した人たちがいったいどのぐらいの割合で卒業しているのかというのは、図2です。同

じ文科省の「学校基本調査」をもとに、3年前に中学を卒業して全日制・定時制高校に進学した生徒数を分母にして、その3年後に卒業した生徒の数を分子にしてやると、こんなふうになるんです。結構男女差があって、女性の方が卒業率が高いんですけど、最近の数値では女性で92%ぐらい、男性で90%ぐらいというような卒業率になっています。

つまり女性で8%、男性で10%ぐらいが、入学から卒業までの間にいなくなっているということです。二つの図の大きな違いとして、図1は在籍者数を分母にしていますが、図2は1学年が分母ですので、卒業までにいなくなる生徒の割合は、図1の数値をおおよそ3倍にしないといけないということがあります。でもそれにしてもこの二つのグラフの向きがおかしいんですね。二つはほぼ平行しなくちゃいけないはずなのに、中退率はこの10年ほど下がっているのに、卒業率も下がっていいます。するとこの差の部分はどこへ行ってしまったんだろう、よく分からないという状態が実は今あります。

ただ推測できる1つの可能性は、通信制高校に転校しているという割合が、この間増えているのではないかということです。通信制高校についても学校基本調査に掲載されてはいるのですが、通信制高校の制度上の特殊性から、単純に比較ができないもので卒業率もはっきりとは求められません。ただ、通信高校にずっとおられる先生方の話だと、だいたい卒業率は実感として2割か3割ぐらいかなと言われています。結局、中退率が下がって、卒業率も下がっている。その差のかなりの部分は、たぶん全日制や定時制から通信制に転校していているということ

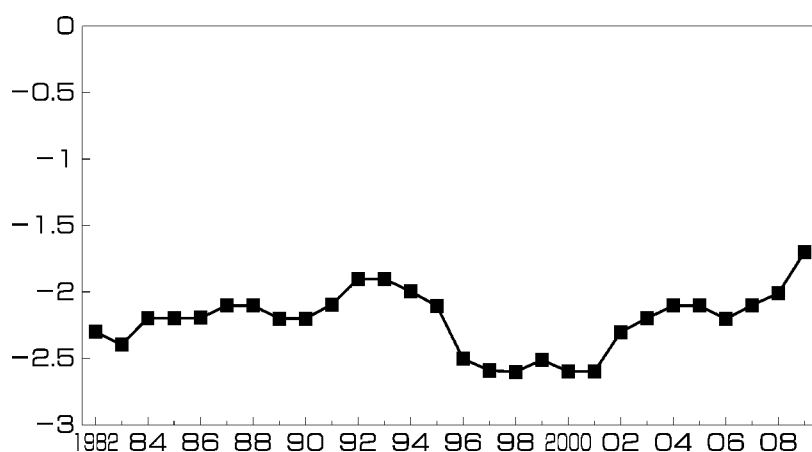
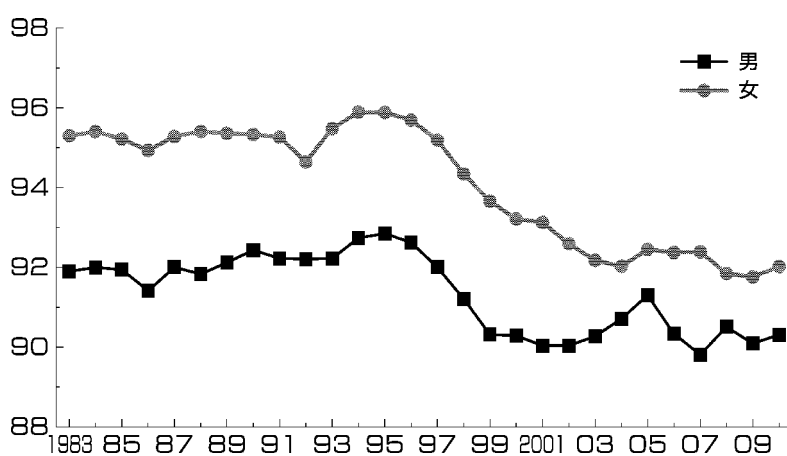


図1 高校中退率（文科省調査）

図2 高校卒業率推計値
3年前中卒進学者に対する高校卒業業者数

なんだと思います。そして転校した後、卒業できているのかどうなのかというのは、そこがもうひとつ実は隠された問題になっていると思います。ただ、全日制や定時制から通信制への転校は、本人や現場教員の感覚としては、やはり多くの場合、「中途退学」と受け取られることが多いのも事実です。したがって、全日制・定時制高校という範囲で見ると、実質的な中退者は減っていないといえると思います。

2. 内閣府の調査の概要

ご紹介する内閣府の中退調査の概要です。昨年の夏に、全国の公立高校をおおむね2年以内に中退した者を対象に行いました。文科省を通して全国の都道府県教育委員会、それからあと市立高校を多く持っている政令指定都市の教育委員会を通し、各学校に質問紙の発送を依頼をしました。ただ、返送先

がその学校だと抵抗がある人たちも多いと思いますので、返送先は内閣府の方に直接返送してもらうという形を取りました。2651通発送し、有効回答数は1176、回収率が44.4%でした。これは予想していたより非常に高かったです。

さてそれで、その回答した人たちの状況です。まず最初、今何をやっているかです。56%が現在働いている。それから在学中というのが3割。失業中で仕事を探している人が14%。家事手伝い、11%。何もしていない、4%。こんな感じです。複数回答で、例えば通信制高校に通う傍ら働いているなんていう人は、「働いている」と「在学中」の両方に答えていますので、回答割合を合わせると100%を越えています。

一番多かった「働いている」ですが、実際にどんな働き方をしているか。やっぱり77%がフリーター、パートなどという働き方です。正規雇用にいるのが17%。ただし17%の内訳は8割まで男性で

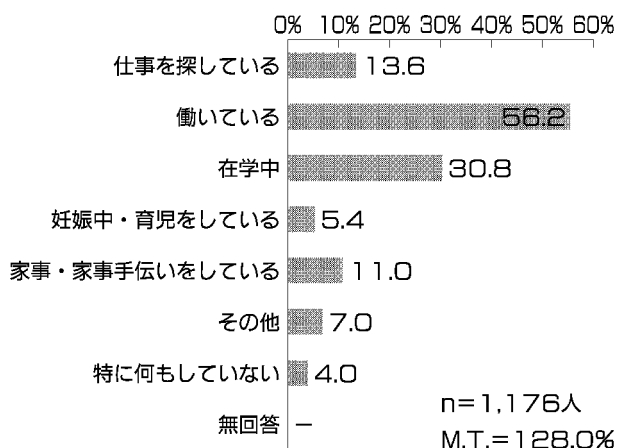


図3 現在やっていること

す。女性は非常に少ない。あと、家業の手伝いなんかも若干あります。

それから在学中ですが、半分は通信制高校です。あと、全日制、定時制の高校に入り直しているのが3人に1人。約1割が大学へ行っています。

中退者の出身家庭の社会的・経済的なバックグラウンド、どういう家庭で暮らしているかですが、想像の通り、両親の学歴で見ると、低学歴層に偏っています。父の学歴でいうと中卒が約2割ですね。就業構造基本調査の35歳から49歳全国平均だとだいたい男性で5%ぐらい、だから4倍近く中卒がいる。母親もだいたいそんなもん。逆に、大卒者は非常に割合が低いということになります。

それから1人親家庭、特に母子家庭の割合が非常に高かったです。同居の家族を聞いているんですけど、父親との同居がないというのが中退者の中で37%でした。一方、日本教育学会の若者のキャリア調査という、2007年4月現在で20歳の全国の若者を無作為抽出した調査では、18歳時点の家族構成で父親と同居してなかったというのが11%です。やっ

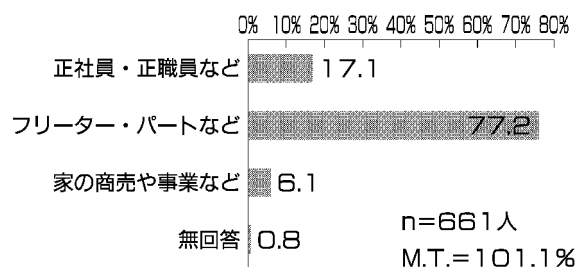


図4 働いている人の働き方

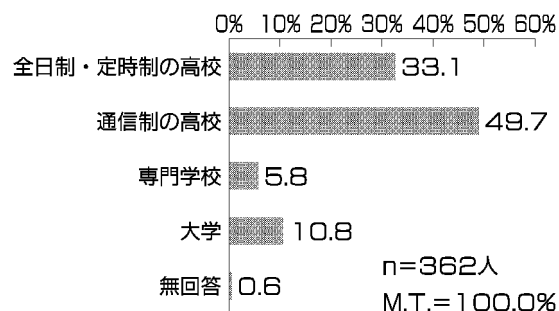


図5 在学者の就学先

ぱりほぼ全体の平均の3倍以上母子家庭がいると、そんな感じになります。

3. 中退者の二つのグループ

中退者を全体としてみると以上のような状況です。ただ、もう少しよく見ると、その中に若干の違いもあります。例えば中退者は全体としては低階層の家庭に偏っているということがあるんですけど、ただ一部に高学歴家庭がいます。大ざっぱにいうと、どうも中退者には2つのグループがあるようです。図7は現在何をしているかと、父親の学歴との関係を、重ね合わせたものです。これで見ると、全体は中卒のところが多いんですけど、ところが大卒が非

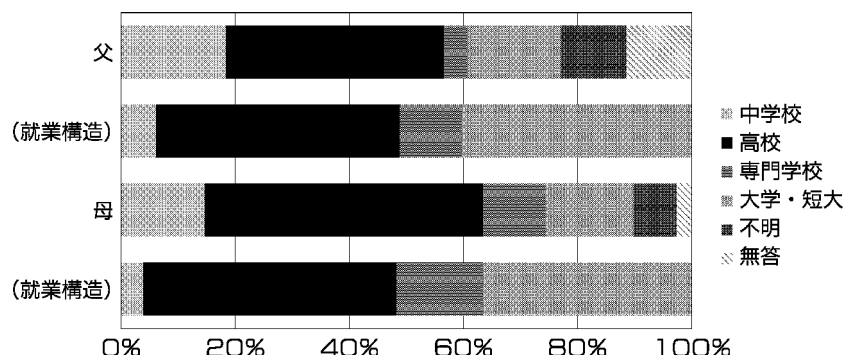


図6 両親の最終学歴 (下段は2007年就業構造基本調査35-49歳学歴)

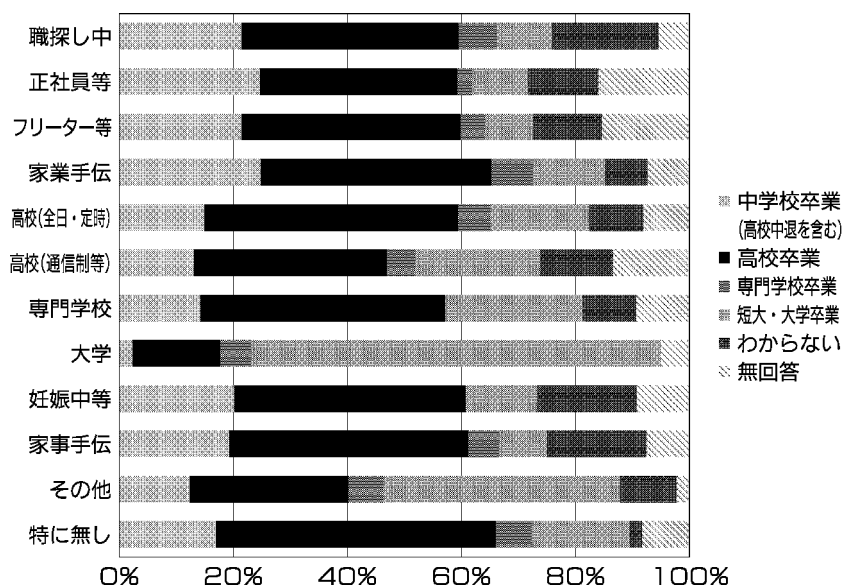


図7 現在していること別に見た父学歴の割合

常に多いところがいくつかあります。

現在大学に行っている人の父親の学歴を見ると、大卒者が5割。それからあとその他、これも父親で大卒者が多いです。その他って具体的に何をしているかということなのですが、ここに該当する人には自由記述で具体的に何をしているか、記入してもらっています。7～8割が書いてくれています。7～8割が、受験勉強、塾、予備校。だからだいたい大学進学を目指して準備をしているというのが、大多数を占めています。

そうするとこういうグループが一方にいて、もう一方の側に低階層グループがいるというようなことになります。インタビュー調査などとも重ねると、相対的に低階層出身でさぼり型の退学、遅刻、欠席・欠時、赤点、問題行動等々というようなことでの、ドロップアウト型で中退していつているグループがかなり多数を占めるんですけど、一部に社会的に見るとかなり高い階層の出身で、神経症型の不登校で、だいたいこの層は進学校の中退者です。進学校を不登校で中退し、その後、通信制だとか高認試験を経て大学進学したり、あるいは大学進学を志望しているという、そういうグループです。

4. 中退者たちの不安感や自尊心

ところで、今何をしているということと、その人

たちが現状の意識、不安感だとか自己肯定感、自尊心感情だとか、そういうのがどういふふうになっているのかということと比較していくと、いくつか面白い傾向が見ます。1つは、将来についての不安をどのくらい感じているかという問いがありますが、比較的不安感が低いグループと、それから不安感が高いグループというのがあります。

中退者ですから、全体の平均的な不安感はやや高い傾向にあると思うんです。ですから、どこも全部過半数がやっぱり不安というところに偏ってはいるんですけど、それでもその中で比較的不安感が低いのは、「現在正社員で働いている」「専門学校に行っている」「フリーター、パートなどで働いている」「それからその他」になりますね。

逆に、非常に不安感が高いグループ、1つは全日制や定時制の高校に現在在学中。もう1回高校に入り直している。それからもう1つは、通信制の高校に入り直している。それから職探し中。大学、これも結構不安が高いです。それから、特になし、つまり今何もしてない層も比較的不安感が高い。

それから自尊心感情や自己肯定感、例えば自分が仲間から信頼されていると思うか。わりにこの自尊心感情が高いグループは、今正社員で働いている人たち。これだと、「自分は仲間から信頼されている」が「とても当てはまる」「まあまあ当てはまる」が8割以上なんです。それから専門学校に行っている人。それから、わりに面白いのは、妊娠や子供を出産して現

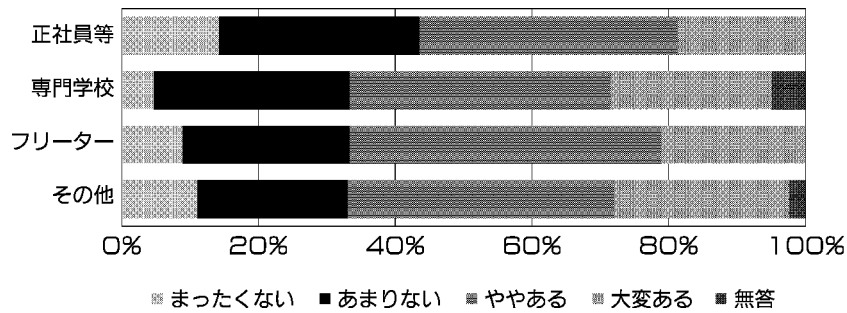


図 8 将来への不安感が比較的低いグループ

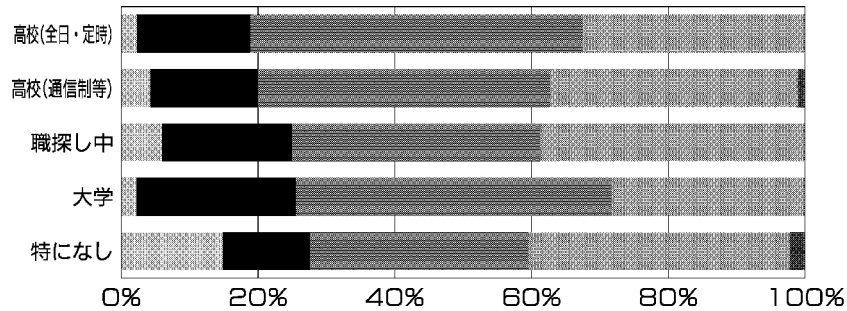


図 9 将来への不安感が比較的高いグループ

在育児中。

それに対して、仲間から信頼されているということについて、肯定が低いグループ。特になし、それから、大学に在学中、通信制、高校の定時制、全日制。

同じく自尊感情ということで、「うまくいかないこ

とでも意欲的に取り組む」。肯定が高いのが正社員とそれから家業の手伝いですね。大学がちょっと微妙で、「とても当てはまる」と、「まあ当てはまる」を足すと比較的高いんですけど、「とても当てはまる」だけ見るととっても低いんです。

それに対して、「うまくいかないことに意欲的に取

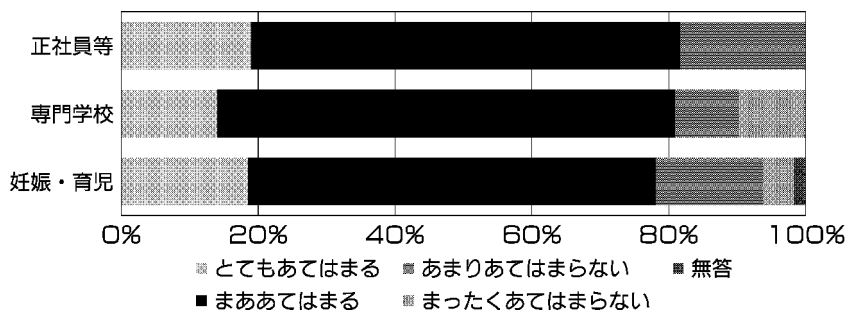


図 10 自尊感情（仲間から信頼させている）の高いグループ

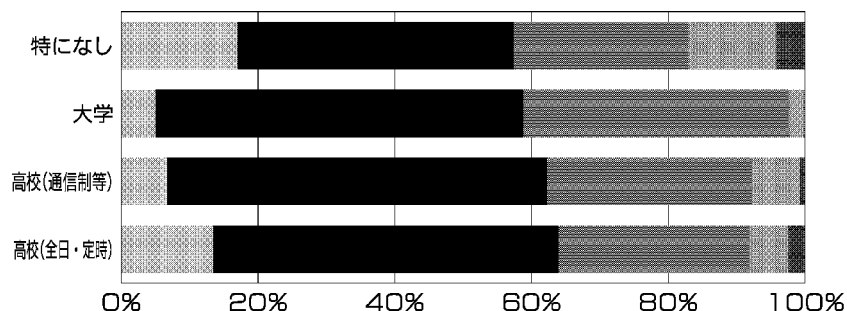


図 11 自尊感情（仲間から信頼させている）の低いグループ

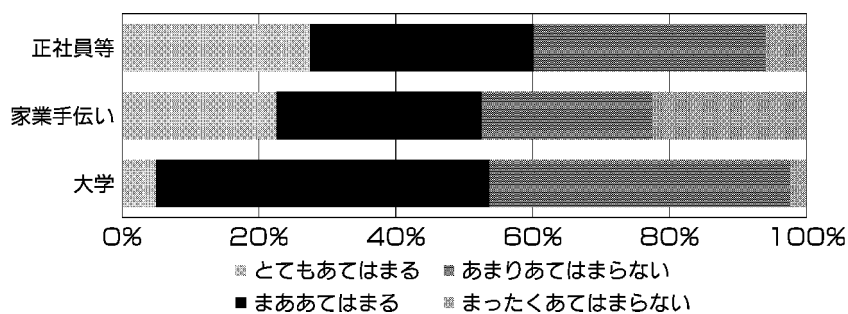


図12 自尊感情（うまくいかないことでも意欲的に取り組む）の高いグループ

り組む」は、「特になし」「何もやってない」が、低いんです。高校の通信制に行っている人たちも、やっぱり低いということになります。

それからあと、例えば孤立感。自分が独りぼっちだと感じるという「孤立感が低いグループ」が、正社員、家業の手伝い、専門学校。それに対して、「孤立感の高いグループ」は、大学へ現在行っている人たち、家事の手伝い、その他、それから高校通信制。

5. 現状ごとの意識の特徴

意識の安定している正社員たち

というようなことで、意識の上で見ると、正社員で働いている人が、全体として言えば一番安定しているというのが結果に出てきています。これはたぶん、日常の仕事、それから収入、それから日常的な人間関係、いろいろなところで、やっぱり相対的に

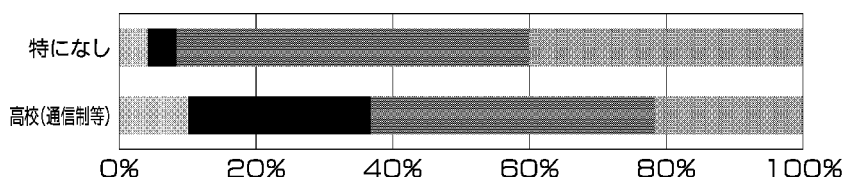


図13 自尊感情（うまくいかないことでも意欲的に取り組む）の低いグループ

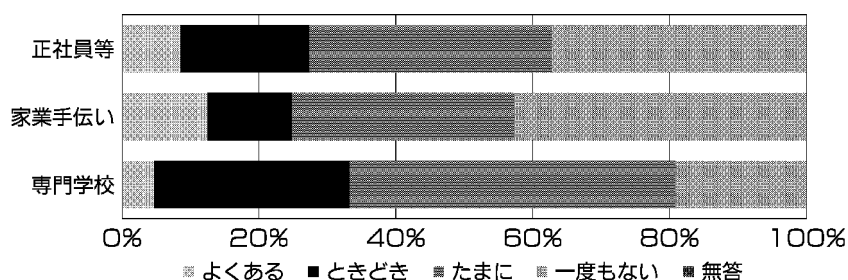


図14 孤立感（自分がひとりぼっちだと感じる）の低いグループ

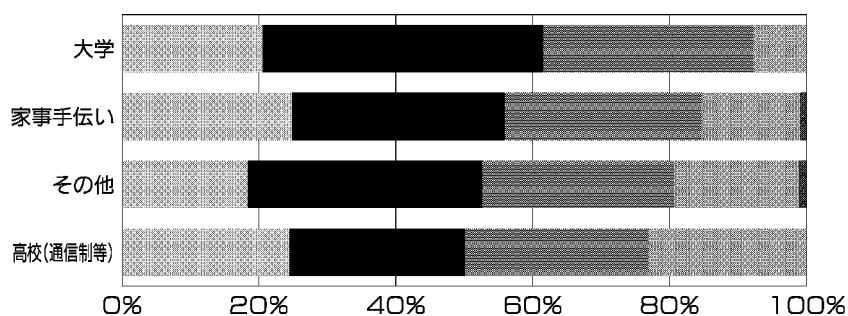


図15 孤立感（自分がひとりぼっちだと感じる）の高いグループ

その生活状況が安定しているということが1つはあるせいだと思います。それからインタビュー調査などと重ねてみると、職場で年上の人たちとの間のいろいろな関係があったりとか、仕事の中でだんだんこういうことができるようになってきているというような成長感覚だとか、あるいはその先の1年後、2年後ぐらい、自分がどういうふうにこの仕事の上でなっていたいかみたいな目標が見えやすい。そういうものがかなりあるせいだと思います。

ただし問題があるのは、とにかく18歳未満の中卒学歴者にとってみると、正規雇用に入るというのは非常に限定されていて、かつ極端なジェンダー格差があります。インタビュー調査で見ていると、圧倒的に多いのは男性の土建関係の仕事ですね。ちなみに、20年前ぐらいにも高校中退調査を別のところでおこなったことがありますが、そのときもやっぱり男性では土建関係が非常に多かったです。このあたりはそこそこあまり変わってないなという感じがします。ただ、そのころは比較的多かった製造業などが男性でも減ってきているという印象があります。また20歳を超えるとドライバー職種というのが比較的学歴なくて入れて、比較的高賃金だったわけですが、こうした職種がいまは非常に不安定化させられていて、年齢さえクリアすれば学歴がなくてもという仕事が男性でも大きく減っています。ただ、女性については率直に言って、「学歴がなくてもこういう仕事があるよね」みたいなのが、なかなか今なくなってきています。

III 意外に不安定な大学進学者

それから、大学進学者の意識というのは、不安感や孤独感が強くて、これは同じ進学者でも専門学校に進学者とかなり対照的です。これはどうも進学した後の大学の環境そのものよりも、中退前後からの経緯に原因があるんじゃないかと思われます。先ほども触れましたが、高学歴家庭で上位進学校の不登校、それで広域通信制のサポート校だとか塾だとか自宅学習でもって高認試験を合格していて大学に進学している。

変な言い方ですけど、中退しても全然リセットのかからないまま突っ走っているという感じなんですよ。つまり中退しようがしまいが、とにかく大学

へ行くということは、最初から決まっている、大学以外の進路というのが世の中にはないというふうに思っていると言ったらいいいの。そのなかで、不登校という経験をしながら、中退してもそれまでの進路意識にリセットがかからない。ここは先ほどの加藤さんのお話の中で、小学校6年から中1にかけてって大きな変化がある。これは小学校から中学校のところで、ある種のリセットがかかるというのが1つ大きいんじゃないかなという気がするんですよ。中退者についても、中退のところでいったんリセットがかかるみたいなことは、もしかしたら意味があることなのかもしれないと思います。

III 特になし（何もしていない） グループの問題

それからもう1つは、「特になし」という、現在何もしていないグループ。これも結構問題がありそうです。このグループは、自尊感情が非常に低い。しかも家庭階層的には下の方が多い。階層的に見るとこれはどうも、世に一般的に注目されている「引きこもり」とも違います。「引きこもり」といわれてマスメディアなどに登場するのは、社会階層として中から上で、周りの親が何とかしてやろうとしたり、一生懸命いろいろな支援機関に連れていくことができるような層です。だけどそうじゃなくて、今までのいろいろな支援のところで十分カバーできてない、かなり階層が低い不活発層というのが一方にやっぱりかなりいるということ、このグループの存在は示していると思います。

III 高校再入学者たち ——再入学は力になっているか

その中で、高校再入学した人たちはというと、通信制にしろ、全日制・定時制にしろ、あんまり意識はよくないです。不安感が高い、自尊感情は低い、孤立感。高校中退者たちが感じる不安感の一つは、自分が所属している場がないという帰属感のなさだと思います。その意味では高校に行き直しているんだから所属の場がある。日常生活の場がある。だけど全然それが居場所に実質的になってない。例えばいま必要な支援として「どんな支援が欲しいか」を聞いているところで、「進路や生活について何でも相

談できる人、そういう人がぜひいてほしい」という要求が、全日制・定時制や通信制に行っている人たちの中で、全体の平均よりもかえって高くなっています。毎日会っているはずの教師は、進路や生活について相談できる人というふうには思われてない。そういう感じなんですよ。そういうふうに見てくると、中退者にとってもう1回今の枠ままの高校に戻るといことが、どのぐらい有効なのかを、もうちょっと考えてみる必要があるかもしれないということです。

6. 中退者支援の課題

ということで最後に、中退者についての支援の課題についていくつか触れておきます。

まず第一に、とにかく中退を減少させること自身、特に中退者に低階層家族の出身者が多いという事実からすれば、やっぱり社会的平等という点からは、重要だと思います。低階層の中退者をできるだけ少なくするということは、社会的平等性を高めるという意味では非常に重要でしょう。ただ誤解を恐れず言えば、全体に中退者が少なくなれば、みんなが安定して仕事が就けるようになるということではありません。安定した仕事が多いか少ないかは、中退者が多いか少ないかとまったく無関係な話です。逆に言えば、平等性が増すということは、やっぱり今まで低階層出身で、かつ様ざまなリスクを負って低い学歴にとどまっているが故に、そういう人たちに不平等のしわ寄せが来ているんだとすれば、そこを平等にすれば、今まで高階層のそういうアドバンテージで持っていた人たちの中から、少しはみ出してもらう人が出てくるということになるのだと思います。

そのために、やっぱり就学ための経済的な支援というのはかなり必要だ。それだけでは解決しないとしても必要だということはあると思います。だから奨学金なんかについてどうするみたいなことも課題になります。とくに日本の奨学金制度は高校生も大学生も、基本的には貸与制で、言い換えれば借金です。少なくとも低所得層にとって、給付制の奨学金などを含む経済支援は必要です。

さてその上で、高校中退者にとって必要な学び直しや成長できる場というのはどんなところかということです。そのことを考える上で、これまでに見てきたことにいくつかのヒントがあると思います。一つは、安定した就労、正規雇用の者たちを中心にして、安定した就労がやっぱり安心感だとか、安定感だとか、成長体験をもたらししているということです。それからもう一つは、中退者にとって高校再入学が、高卒資格が取得できるという以上の意味をあまり持てていないということです。またとくに通信制の場合、先ほどもちょっと触れましたけど、トップ進学校出身の中退者は、高認試験を受けるにせよ、通信制で単位を取るにせよほとんど苦勞しないです。別に頑張らないでもだいたい普通に取れちゃう。だけどそれ以外の層だと、特にやっぱり通信制って、卒業までこぎ着けるにはかなりしんどいって経験をしている人たちも多いという感じがします。このあたりを考えると、高卒資格の取得は重要だとしても、それを高卒資格のための学習にとどめないで、就労体験なども含めもうちょっと広い社会的な体験や、進路模索と結び付けるということがあっていいんじゃないかという感じがします。

特に、インタビュー調査でも感じるのは、中退後に多くの人たちが進路の再発見をしていっているわけですけど、それは何か、本人があらかじめ中退前からしっかりとした将来計画を持っていたというようなことではない。むしろ「偶然の出会いの中で」というのが非常に多いと思います。ただ問題は、偶然の出会いというのが、実は一人一人の本人や家族が持っている関係性だとか、豊かさによって規定されているということです。例えば中学時代から「悪い」仲間がいて、仲間と一緒に遊んでいて、中退するときもそういう連中と一緒に、中退後もそういうネットワークの中で生きている男の子たちだと、そういうネットワークのなかからそれなりに成長感の感じられるような次の仕事なども見つかっていくということがよくあります。またそういうネットワークには、いろんな意味でモデルになるようなちょっと年上の先輩などもありします。

ただ中退者のすべてがそういう豊かなインフォーマルネットワークを持っているわけではない。そこでそういうネットワークを作れるような学びの場、

成長の場を意図的に作っていく必要があると思います。具体的には、就労体験だとか地域の大人とのかわりなどを組み合わせた学びの場づくりです。例えばドイツやデンマークの生産学校だとか、フィンランドのワークショップだとかというのは、困難層の若者たち、あるいは学校をドロップアウトした若者たちを支援する機関です。そこでは、職業体験、就業訓練的なことをやっているんですが、必ずしも、特定の職業資格を取らせるというよりは、一定期間の就労体験と学習を組み合わせながら、その中でもっと次の進路を模索していくという「模索の場」として、就労体験が位置づけられ、またそこに様々な大人が関わって行っている。

高卒資格取得のための学習と職業体験などを結びつけるということでは、日本でできそうなこととしては、例えばこんなことが考えられます。通信制高校のなかには、かつては居住地域ごとに、レポート学習の相互支援のための学習会や生徒会のようなものがつくられていたところがあります。いまでも続いているところもあります。そこはもともと通信制高校ですから生徒たちの年齢はばらばらで、けっこう年上の人たちもいます。そういう場を例えば地域若者サポートステーションなどと連携する形で再構築していく。そうすることで、一方では職業体験（アルバイト就労などを含め）と、高卒資格取得のための学習、さらに地域の異年齢の人たちのネットワークといったものを結びつけていく、そんなことができないでしょうか。

先ほど紹介したようなデータを見ても、高校を一旦中退した若者たちを、もう一度、同じ高校に戻すというだけでは、うまくいかないことが多いように思えます。とくに全日制高校の場合、同一年齢集団規範が強いこともあり、一つでも年上のものがその集団に加わるというのは難しいことが多いように見えます。定時制についても最近は異年齢の生徒が減ってきて、同一年齢集団的になっているところが多いようです。そうすると、もう少し別の学びや成長の場ということが必要なのではないでしょうか。

質疑応答部分

（質問１） 高校に再入学することにさほど意味ない

かもしれないというお話だったが、こういうデータってやめた理由についての分類との関係は、データの的にはないのか？

（質問２） 高校に戻ることの意味がないとすれば、オルタナティブな別の空間とは、具体的にどういうイメージなのか。

（乾） お二人からの質問に関わって、お答えするよりも前に、加藤さんへの質問です。加藤さんのお話を聞いていて、例えば自分の経験やいろんな若者たちの聴き取りなどから次のようなことを感じます。それは、小学校から中学校、あるいは中学校から高校へという学校間の移行が、ある者たちにとっては「いままでの自分」をリセットする機会になっているということです。小学校から中学校へ行ったときに、例えば中学校へ行ったときに英語が入る。これは初めてでみんな同じ共通のスタートだから、６年間で散々差がついちゃうという教科とは違うから、ちょっと頑張ってみるとかいう話だとか。それから、例えば中学から高校なんかで、意図的に、進学校でも全然何でもないんだけど、遠くの学校を選ぶ。要するに中学時代の友達関係を、全部リセットをかけたから、絶対誰も自分の知らないところに行きたいって。思春期や青年期には、場合によってそういうリセット機会というのが重要な意味を持つのではないかと思うのです。加藤さんのお話でいうと、やっぱり小学校から中学校１年生に上がるそのところに、すごく重要な意味があるということなのか、思春期や青年期にいくつかそういうリセット機会みたいなのがあって、そういうところがどういうふうに、そのところで生かされるかということの問題として引き取っていいのか、いかがでしょうか。そのことは例えば中退経験というのがリセットになるかならないのかという問題がひとつあるわけです。神経症的な不登校で中退して、それでも塾や予備校に通って高認試験に通って大学に行っている者たちを見ると、結局リセットがかかってないことが多い。でも「どこかでリセットをかけないと、絶対途中でつぶれるんじゃないか」というような感じがするわけだね。だからもう一方で、もし中退経験というのを逆にリセットとして生かすとすれば、どういう生かし方があり得るんだろうかということです。

つまり、そのことが結局、中退経験というのをど

ういう形で、どういう場で受け止めさせるかという問題とかかわってくるんじゃないかという気がするのですね。そうすると、先ほどご紹介したようないくつかのデータから言うと、やっぱり高校に戻った中退者も、やっぱりまだリセットがかかりきらない状態で、学校に戻っているというか、そういう感じなんですよね。そうすると、いったんとにかくいろいろな経緯の中でここやめちゃったならば、もう1回同じところに戻るといよりは、もう少し広い文脈の中で自分の経験を振り返ったり、その先を模索するような、そういう場が必要なのではないかと。それが最後のところで提起したことです。吉田さんが今やられているような田奈高校でつくっている学校というのは、これはあくまで学校ではありますが、わりに私がイメージしているこういうのと似ているかもしれないという気がします。やっぱり就労体験というのは、どこかですごく重要な経験の核にさせる必要があるだろう。そのときに例えば、バイターンの話というのはまさにそうなんですよね。今、職業体験をかなりきちんとさせたいというのはありますけれど、だけどそれだけでやっぱり受け皿はなかなかない。ただあれだけアルバイトをやっているんだっただらば、アルバイトというのをもう少し教育的に使うみたいなことというのができないだろうかというようなこともあります。

吉田さんと同じような授業を実は大学でもやっていて、今、自分のアルバイト体験レポートを書くというのをやっていて、実に面白いんです。アルバイトで働いていて、いいことも悪いことも出てくるのですが、だけど、結局働くことって深いところでかなり共通の問題が出てくるじゃん！みたいなことがそこから自ずと浮かんできます。そういうものと、もちろん一方では高卒資格を取りたいという要求があるわけだし、そういうものをどう組み合わせていくか。それこそ、学校の外と中の境界線上に、「いかがわしい空間」をつくるというようなのがあっていいんじゃないかなというのが私のイメージです。

(質問3) 生徒そのものが持っている進学志向、受験型志向および、学力中心の評価制度に関わる学校システムの問題に対しては何らかの切り替えが必

要。その子の持つ可能性や、悩みを受け止める学校の受け皿が、次の希望やチャレンジに繋がる。そういった点についての見解を聞きたい。

(質問4) あらかじめ受け皿をつくるのではなくて、子どもが必要とすることに大胆に応えていくという、そういう決意をして踏み込むということが重要なのではないかと。感想ですけど。だから「いかがわしい場所」でいい、好きですよ、これ。

(司会) お1人ずつ、今までの全体を含めながら最後のまとめなり、ご感想なりを。

(乾) 最後から2番目からご発言された先生だったように思うんですけども、ご意見は大変よく分かりますし、まったく賛成です。ただ、先ほど私の発表のあれでいえば不登校中退型大学進学者に当てはまる問題だろうと思うんです。だけど、もう1つ、もっと違う意味で、学力評価だとか何だとかというのは、要するにほとんど事実上関係のない世界というのが、本当は、もうちょっと以前はもう少し広がっていたはずなんですよね。

例えば夜間定時制なんて、ちょっと前までで言えばやっぱりそうであって、労働なんかとも結び付いていて、それでかつ、ある意味じゃ、異年齢集団でした。そこのところが、すごく今は薄くなっちゃっていることも、もう1つあるんじゃないかという気がします。高校に戻っても充実感がないということの1つの理由は、やっぱり同一年齢規範というのがすごくきつくて、それが結局、学校へ戻っても、なかなか自分の居場所になりきれないでいるところが、特に全日制、定時制なんかの場合はあります。だからそういうことも含めて、やっぱり学校的でない、「いかがわしいもの」というものを、もっと大胆に持ち込んでいけるような場が必要だと。それはたぶん、今多くあるフリースクールとは違う文化だと思うんです。もうちょっと、「底辺層的文化」と言うと、やや誤解が生まれるかもしれないんですけど、そういうものと結び付くような部分があると、もうちょっと抜け道があるんじゃないかなという感じがしています。